様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)研究成果報告書

平成 25 年 6 月 5 日現在

機関番号：32612
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2012
課題番号：23720371
研究課題名（和文）　中世ヨーロッパにおける説教形式の進化の研究

研究課題名（英文）　Evolution of the Sermon Form in the Middle Ages

研究代表者
赤江　雄一（AKAE YUICHI）
慶應義塾大学・文学部・助教
研究者番号：50548253

研究成果の概要（和文）：説教術書ジャンルに属する著作および関連する説教著述支援ジャンルとの比較分析作業を通じて、13 世紀後期から 14 世紀前期にかけて生じた、新しい説教テクニックの導入によってもたらされた説教形式の重要な変化を同定した。この進化した説教形式に対する説教者たちの異なる態度を探ることで中世後期の聖書解釈・翻訳、修辞学、ラテン語写本研究、書物史、読書実践の歴史の絡み合う新たな研究領域を見いだした。

研究成果の概要（英文）：The present research identified significant elements of changes in the sermon form which occurred during the second half of the thirteenth and the first half of the fourteenth century through comparative analysis of works which belong to the genre called *artes praedicandi* and related genres of preaching aids. Exploring different attitudes of contemporary preachers towards the evolved sermon form led to a new area of study where history of biblical interpretation and translation, history of book and reading praxis, rhetoric, and manuscript studies intersect.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学、西洋史
キーワード：中世後期ヨーロッパ精神史・スコラ学・聖書解釈/翻訳・修辞学・ラテン語写本研究・読書史/書物史・国際情報交換

１．研究開始当初の背景

本研究は、科学研究費補助金研究活動スタート支援（平成 21-22 年度）「中世ヨーロッパにおける説教術書の研究：説教理論における〈説教の受容〉の問題」（研究代表者:赤江雄一、課題番号: 21820037）の問題意識を引き継ぎ、さらに深化させるものである。

そこでも述べたように、本研究開始の背後には、中世における説教あるいは説教史研究の重要性は近年急速に認識され陸続と成果が生み出されつつあると同時に、とりわけ西ヨーロッパにおいては 13 世紀以降、説教活動は「活版印刷以前のマス・メディア」と呼ばれるほどの規模で行われたと考えられるようになってきたという背景がある。

こうしたマス・メディアとしての説教に注

目する研究は膨大な数の写本が存在する「範例説教」と呼ばれる史料に注目してきた。他方、はるかに少ない写本数ながら、説教執筆の手引きあるいは説教理論を扱った「説教術書」と呼ばれるジャンルについては、研究の蓄積が遅い。その理由は、史料価値について議論は未だ定まっていない点にある。

しかし、本研究代表者は、一般的に説教術書と範例説教を比較するのではなく、それぞれの著者が同じ時期の同じ知的環境を共有したと考えられる特定の説教術書と特定の説教とを、説教テクニックなどに注目しながら比較するならば、説教術書は説教執筆実践を高度なレベルで反映していることがあり、その場合、説教術書はこれまでに考えられていたよりもはるかに高い史料価値を有しうるという成果を得て、その成果を公刊してきた。科学研究費補助金研究活動スタート支援（平成 21-22 年度）および本研究課題「中世ヨーロッパにおける説教形式の進化の研究」は、その成果を基礎としてさらに説教術書の史料的ポテンシャルを探求するものである。

２．研究の目的

本研究課題「中世ヨーロッパにおける説教形式の進化の研究」は、説教術書の史料価値見直しというこれまでの応募者の研究成果に基づき、13 世紀末期から 14 世紀初頭の説教術の変化を見極めることによって、中世ヨーロッパ説教史研究に貢献することを目的とする。

３．研究の方法

(1) 写本・刊行資料の収集
(2) 上記資料の整理・転写・校合
(3) 二次研究資料の整理・精読・分析
(4) デジタル資料の収集、整理、活用
(5) 論文等執筆

４．研究成果

下記年度別で述べる。

平成 23 年度　初年度の計画の重点は、写本および刊行史料の収集、および写本の転写に置かれた。まず本研究が焦点をあてている重要史料である 13 世紀後半に著されたウェールズのジョンの『説教術書』を収めた写本のなかでとりわけ収集困難なものについて、収集作業を進め、他の説教術書についても収集を進めた。他に収集対象として、13 世紀に大いに発達を見せた説教著述支援に関わる隣接ジャンルを含めた。具体的には、範例説教集、『聖書標準注釈』を元とする種々の聖書注釈書、語釈集、コンコーダンス、ヘブライ語語釈等である。これらの多くは校訂本が存在していない。また、初期刊本のかたちで印刷されていたとしても、中世の同時代の写本そのもののなかに、それらがどのように用いられたかを示す手がかりが残っている場合がしばしばある。説教形式の発展のなかで生まれた、あるいは取り込まれた新しいテクニックなどは、これらの説教著述支援著作ジャンルの誕生と発展と密接に連関している。収集作業は、関連写本のマイクロフィルムあるいは CD-ROM というかたちでの収集で行った部分もあるが、実際に写本を要する図書館等におけるデジタルカメラでの撮影も用いた。こうした作業は平成 23 年 7 月にオックスフォードボドリアン図書館およびケンブリッジ大学図書館等で行った。

写本を用いて研究を進める場合、テクストを転写し、さらに時に他の写本との校合などを含む校訂作業が必要である。この点に関して、平成 23 年 7 月にオックスフォードにおいて、近年急速な進展を見ているディジタル・ヒューマニティーズのワークショップに参加し、新しいデジタル上での校訂技術の導入を図った。並行して、主要写本からの本文転写作業が終了しているウェールズのジョンの説教術書の内容と、前後する時代の説教術書との比較分析作業を進めた。そこで得られた知見に関しては、平成 23 年 11 月に広島史学研究会大会西洋史部会にて報告した。これらの成果を含む単著公刊のための第一次英文校閲作業も進展を見た。

平成 24 年度

上記の作業をさらに進めつつ、論文執筆等に取り組んだ。その概要は以下のようなものである。

13 世紀初頭の托鉢修道会による説教活動の開始と興隆とほぼ同時期に、「新説教形式」と呼ばれるそれ以前とは異なった説教形式

が生まれ定着し、宗教改革の時代までさかんに用いられることになった。「新説教形式」は、その基本的特徴を共有しながら 13 世紀から 15 世紀にかけて変異していく。この変化は漸進的なものであるが、13 世紀後半に著されたウェールズのジョンの説教術書の内容と、前後する時代の説教術書との比較分析作業を進め、それらと併せて同時代の説教を検討する作業を行うことで、「(部分の) 確証」という構成要素と「語的一致」というテクニックの導入が導入された。これが説教形式の進化における一つの画期をなす。しかし、ウェールズのジョンの説教術書とその後 30 年ほど後に書かれた説教術書を比較すると、さらに「語的一致」というテクニックに対する説教者たちの認識が大きく変化したことかも明らかになった。説教者たちの「語的一致」に対する賛否両論の背景についても考察を進めた。

上記の成果については、平成 24 年 7 月に立教大学で開かれたインテレクチュアル・ヒストリーのシンポジウムで日本語で報告を行うと共に、同月イギリス・リーズで開催された国際中世学会 (International Medieval Congress) において、国際中世説教研究学会が組織した説教術書ジャンルに関するセッションにおいても報告を行った。同セッションで報告したエレオノーラ・ロンバルド（リスボン大学)、ヴァレンティーナ・ベラルディーニらと研究に関しての情報交換も行った。平成 2 5 年 2 月にはリーズ大学中世研究所のセミナー Medieval Group に招聘され、報告を行った。なお、上記の３報告と深く関連する論文が、ヒロ・ヒライと小澤実の編集により中央公論新社から 2014 年中に刊行予定の論文集に収められる。さらに英文単著を脱稿した。

本研究において得られた成果は、これまでごく概括的に述べられたことはあるが、説教術書のなかに見られる異なる複数の考えを浮き彫りにし、さらに実際に書かれた説教における実践との比較によって分析の精度を上げたことで、オリジナルな貢献をなしえていると判断している。

本研究のなかで浮かび上がってきたことは、中世の説教著述の理論と実践のあり方を探求することは、当時におけるスコラ学の発展、聖書解釈・翻訳史、修辞学、ラテン語写本研究、読書史・書物史、読書実践の歴史が絡まり合うインテレクチュアル・ヒストリーの場としてのポテンシャルである。

今後の課題として、ひとつには、前述した範例説教集、『聖書標準注釈』を元とする種々の聖書注釈書、語釈集、コンコーダンス、ヘブライ語語釈等の説教著述支援諸ジャンルの相互関係についてさらに分析を深めることが挙げられる。もうひとつとしては、説教伝達の理論と実践を踏まえた上で、説教において伝達されたメッセージについての研究を進めることがあげられるだろう。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計４件）

① Yuichi Akae, Biblical Concordance and Preaching Techniques in Late Medieval England, Institute for Medieval Studies Medieval Group, 2013 年 2 月 13 日, University of Leeds（イギリス）

② Yuichi Akae, The Use of *Concordantia Vocalis* in Modern Sermons from Late Medieval England, International Medieval Congress 2012, 2012 年 7 月 11 日, University of Leeds（イギリス）

③ 赤江 雄一、説教と学問的手続き―中世後期における説教者たちの葛藤、シンポジウム中世・初期近代インテレクチュアル・ヒストリーの挑戦、2012 年 7 月 6 日、立教大学

④ 赤江　雄一、新説教形式とウェールズのジョンの説教術書、2011 年度広島史学研究会大会西洋史部会、2011 年 11 月 30 日、広島大学

〔図書〕（計 1 件）

① 赤江 雄一「語的一致と葛藤する説教理論家　中世後期の説教における聖書の引用」ヒロ・ヒライ・小澤実編『知のミクロコスモス　中世・ルネサンスの精神史研究』中央公論新社 2013 年刊行決定

６．研究組織

(1) 研究代表者

赤江　雄一 (AKAE YUICHI)
慶應義塾大学・文学部・助教
研究者番号：50548253

(2) 研究代表者

なし

(3) 研究代表者

なし